

本資料の著作権は江戸川カタック社に帰属します。無断での複製・転載・配布・引用・改変・転用を固く禁じます。© 江戸川カタック社（主宰：林広貴）

中級Ⅲ 至高神クリシュナ

いよいよ中級も終わり、そしてクリシュナ成長譚にちなんだ命名も最後となります。

理論篇ではヒンドゥー教の世界観と規範を示した教典である『マヌ法典』の概要と、中世インドに興隆しカタックにも決定的な影響を与えた思想運動バクティについて学びます。

実践篇のヌリツタ篇ではトウクラ、パラン、チャクラダール・トウクラ、チャクラダール・パランを複数学びます。いくつかリズム把握がむづかしいものが出てきますので、がんばりましょう。

そして最後にフルの曲として（ヌリッタ・ヌリティア両方の要素をもつ）、ヴァラナタ・チャビという曲で踊ります。バジャンというジャンルの曲です。こちらもビルジュ・マハラジの作曲と振付で、主題はクリシュナ。

神話篇ではヒンドゥー教最大の聖典である「バガヴァッドギーター」の概要を説明し、いくつか有名な文句を覚えます。

『マヌ法典』とその世界観

「中級Ⅰ」において、アーリア人がもってきたバラモン教と、もといたひとたちの土着の信仰が融合してヒンドゥー教が誕生したと述べました。

アーリア人が入ってきたのは紀元前1500年頃です。そこから1500年くらいかけてゆっくりとヒンドゥー教の信仰のありかたや制度がまとまってきた。それが集大成されたものが『マヌ法典』です。成立は紀元前200年から後200年頃と推定されています。マヌというのはひとの名前で、人類の始祖ということになっています。

『マヌ法典』はカースト制度が神によって作られたとする説を展開するものとして有名です。

渡瀬信之氏の中公新書『マヌ法典 ヒンドゥー教世界の原型』によれば、それは以下のような論理によります。

- | | | | | |
|---|--|--|--|--|
| 1 | このもの（宇宙）は、かつて暗黒からなっていた。それは認識されず、特徴なく、推測を超え、識別されず、いたるところ眠っているかのようであった。（一・五）
これが冒頭の言葉です。世界は暗黒であったと。 | | | |
| 2 | 闇の中に存在していた永遠の存在スヴァンブーがあらわれ、自分の身体から世界を創造することを欲した。
彼はまづ水を創造し、その中に種子を落とした。種子は黄金の卵となった。そこからいっさいの世界の祖父であるブラフマンが誕生した。 | | | |
| 3 | ブラフマンは卵を二分してそれぞれの殻で天と地を造った。それから名称や行為や機能や形といった概念をつくった。
それから次々と神々や祭祀、時間、言葉、欲望、善悪、幸不幸などをつくった。 | | | |
| 4 | そして最後に世界の繁栄を願い、この使命を担うためのバラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラを自らの身体から生み出した。
バラモンは口から、クシャトリヤは腕から、ヴァイシャは腿から、シュードラは足から。 | | | |

チャクラダール・トウクラ／Chakradar Tukra／चक्रदार टुकड़ा									
1				2					
Thai Taa	Thai Taa	Tig dha dig dig	Thai	Tat Tat Thai	ss	Taa Thai			
Thai Taa	Thai Taa	Tig dha dig dig	Thai	Tat Tat Thai	ss	Taa Thai			
Tat Tat	ss	Tat Tat	ss	Tat Tat					
Tig dha dig dig				Tat Tat Thai	s	Taa Thai yi			
Tig dha dig dig				Taa Thai yi					
Tig dha dig dig Thai				Taa Thai yi					
Ta Thai	ss	Ta Thai	ss	Ta Thai	1 2				
Varanat Chabi Bhajan in Dadra Discription of Bhagwan Krishna									
これは「ダードラ」というタールで歌われる「ヴァラナタ・チャビ」という曲で、「バジャン」という歌曲の種類に属します。									
バジャン（Bhajan／भजन）とは、インドの伝統的な神への讃歌・信仰歌のことです。									
ダードラ・タールは「中級Ⅱ」のサラスワティー・ヴァンダナですすでに登場済です。									
ヴァラナタ・チャビ（Varnat Chabi）というタイトルは曲中で何度も繰り返される ヴァラナタ・チャビ・シャマ・スンドラ（Varnat Chhavi Shyam Sundar）から取られています。									
なお、何度も繰り返されるメインの詩節のことを「ムクラ（Mkura）」。									
Varnat は「描写する」、Chhavi は「姿、容姿」、Shyam は「青い、黒い＝クリシュナ」、Sundar は「美しい」。									
全体で「青黒い肌の美しいクリシュナ神の姿を描写する」という意味になります。つまりクリシュナに捧げる讃歌。宗教的にいえばバクティ思想の表現です。									
Dha dhi na Dha tu na Dha dhi na Dha tu na × 4									
12345 12345 12345 121212									
Varnat Chhavi Shyam Sundar ×3				美しいクリシュナ、あなたを讃えます。					
aeso moo haka rasaala				甘美で魅惑的なあなたを					
aeso moo haka rasaala									
Varnat Chhavi Shyam Sundar ×2									
Dha dhi na Dha tu na									
rasata anga beeta basana ×2				輝く黄色い衣（ドーティ）をまとったひと					

banka brukuti galemaal ×2				優美に眉を動かすひと				
Dha dhi na Dha tu na Dha dhi na Dha tu na								
siisa mukta kare bansi ×2				頭に冠を戴き、手にパンスリをもつひと				
kee sara ke tirak bhala ×3				サフランの印（ティラカ）を額に描いたひと				
Varnat Chhavi Shyam Sundar ×2								
Dha dhi na Dha tu na Dha dhi na Dha tu na								
rachaka chalata chapara chaal ×2				軽やかで優雅な足取りで歩くひと				
chanchala nayanana bishaala ×2				揺れる大きな瞳で宇宙を見渡すひと				
nupula dhwani gunjana kala ×2				足首の鈴を美しく鳴らすひと				
Dha dhi na Dha tu na Dha dhi na Dha tu na								
nupula dhwani gunjana kali								
Dha dhi na Dha tu na Dha dhi na Dha tu na								
nupula dhwani gunjana kali								
niilatata hali beeta taal ×3				嗚呼あなたクリシュナは、愉快地踊り、リズムを刻む				
Varnat Chhavi Shyam Sundar ×2								
Dha dhi na Dha tu na Dha dhi na Dha tu na								
Ta Ta Ta Ta Ta Ta ×6 Music part 123 123 × 6								
123 123 1234~								
jaya jaya jaya sunaho hali ×2				クリシュナよ、あなたに栄光あれ				
jala jamo na umanga bhali ×2				ひとびとは喜びに溢れ、川辺につどう				
dana dana brabi shama kahi ×2				偉大なクリシュナを讃えます				
dara shama kali sundar				黒く美しいクリシュナを崇拝します				
nandarana nandarana				ナンダ（ヤシヨーダの夫、育ての親）の子よ！				
Varnat Chhavi Shyam Sundar								
Varnat Chhavi Shyam Sundar								
Shyam Sundar								
タタタ タタタ タタタ タタタ タタタ タタタ タタタ								
タタタ タタタ タタタ タタタ タタタ タタタ タタタ								
タタタ タタタ タタタ タタタ タタタン タタタン タタンタ								
タタタン タタタン タタンタ								
タタタン タタタン タタンタ タン								

『バガヴァッド・ギーター』について

インドの二大叙事詩に『マハーバーラタ』『ラーマヤナ』があります。ともにヒンドゥー教の文学であり、聖典でもあります。一本筋の通ったおはなしとして面白いのは『ラーマヤナ』のほうで、ラーマという王子が誘拐されたお姫様を助けるためにお猿の従者と冒険に出るはなしです。ちなみラーマもヴィシュヌの化身です。

『マハーバーラタ』はバラタ族の戦争のはなしですが、膨大かつ雑然としていて通読には適さず、部分部分が切り取って読めます。第6巻の23～40章にあたるのが『バガヴァッドギーター』です。

『バガヴァッドギーター』は「尊き神の歌」という意味で、尊き神（バガヴァッド）とはクリシュナのことです。ヒンドゥー教最大の聖典とされ、ガンディーが愛読したことで有名です。『論語』、『聖書』、『コーラン』などと比べて分量が少ないのですぐに読めてしまうありがたい聖典です。

アルジュナは戦士、クリシュナはアルジュナが乗る馬車の御者です。アルジュナは戦場にあり、敵の中には親族がいる。血のつながったものを殺さねばならないことにアルジュナは怖気づく。『ギーター』はそこから始まります。

私の四肢は沈みこみ、口は干涸び、私の身体は震え、総毛脱つ。（一・二九）

私はまた不吉な兆を見る。そしてクリシュナよ、戦いにおいて親族を殺せば、よい結果にはなるまい。（第一・三一）



『ギーター』は戦いの直前に座り込んでしまったアルジュナに対して、クリシュナが「立ち上がれ」と鼓舞するはなしです。その鼓舞する説法に、のちに最大の聖典と呼ばれることになるようなヒンドゥー教の思想が凝縮されているのです。

戦士を鼓舞するといってもむしろ親族を殺すことや戦争を賛美するものではありません。戦争は人間が生まれ落ちた、どうにも動かせない、所与の状況の象徴です。		
そして戦いは人間が生きること、行為全般の象徴です。生きている以上、行為（カルマ）から逃れられない。		
そこでクリシュナは結果に執着するなと説きます。		
成功と失敗、幸福と不幸を平等同一のものとして見、自分の定められた行為に専心せよ。平等の境地に達すれば苦しみから離れ、輪廻転生から解放される。すなわち解脱できると。		
ここではいくつか有名な文句を引用しておきます。出典は上村勝彦訳の岩波文庫です。		
苦楽、得失、勝敗を平等（同一）のものと見て、戦いに専心せよ。そうすれば罪悪を得ることはない。（二・三八）		
あなたの職務は行為そのものにある。決してその結果にはない。行為の結果を動機としてはいけない。また無為に執着してはならぬ。（二・四七）		
自己の義務（ダルマ）の遂行は、不完全でも、よく遂行された他者の義務に勝る。自己の義務に死ぬことは幸せである。他者の義務を行うことは危険である。（三・三五）		
たまたま得たものに満足し、相対的なものを越え、妬み（不満）を離れ、成功と不成功を平等（同一）に見る人は、行為をしても束縛されない。（四・二二）		